性差本質論から両性的成熟論へ

― ジンメル、マリアンネ・ウェーバー、ギリガンの女性論 ―

川　本　格　子

1．はじめに

ジェンダーという語は、そもそも性差を文化、社会レベルで規定されたものであることを示すために、生物学的な性であるセックスに対する概念として用いられてきた。しかし、今日、バトラーによって「セックスはすでにジェンダーである」(Butler：1990＝2007：p. 9/p. 29) と言われる時、セックス自体がすでに社会的文化的な構築物であると考えられている。たとえ生物学的な区別であっても普遍的な根拠をもつものとは考えられないということである。

しかし、われわれは、特定の社会、文化の中にあって、そのジェンダー／セックスについての考え方の枠組みの中にいる。そして、そこから外に出ることは容易ではない。そういう意味で、われわれは、性を軸にした特質を何らかの形で担っているといえるだろう。すなわち、社会の文化的な現象として、思考様式や行動様式が性を軸に二種類に区別され、そのうちの一方が男性に他方が女性に割り当てられている。そして、こうしたあり方の、二つのうちの一つが人間の標準とされ、文化や社会の主体となり、他方がそれに従属するという構造をとっているのである。

このような男女の非対称性を問題にするのが、ジェンダー論であり、フェミニズムである。セックスそのものが、社会的文化的構築物であり、フィクションであるにせよ、性をめぐる問題は実際に存在している。

男女の性差が問題にされるとき、フェミニズムに関わるものにおいても、こ

れを認める立場をとるものと、そうした立場を批判的に捉えるものとに分かれる。差異派フェミニズムは積極的に前者の立場をとり、女性性の価値を強調する。後者の立場に立つものは、性差を認めることが、既存のジェンダーロールを肯定する契機になりうることを懸念する。だが、いずれの立場をとるにせよ、実際に存在する性をめぐる諸問題をどのように解決するかが問題なのである。

本論では第一波フェミニズムの時代に、男女の質的な違いを認める立場に立って女性論を展開した、ジンメルとマリアンネ・ウェーバーの女性論を採り上げ、今日から見れば保守的であるとされる性差論からどのような女性論が展開されたのかを論じたい。さらに、両者よりはずっと後の世代に属するキャロル・ギリガンの『もうひとつの声』(1982) について、やはり性差を認める立場にあるこの著作の狙いが実際にはどの点にあったのかについて考えてみたい。ジンメルやウェーバーとは時代も思想的背景も異なるギリガンであるが、三者の主張の類似点とその意味について論じるつもりである。

2．文化と性の問題——ジンメルの女性論

2.1　女性運動と文化の問題

マリアンネ・ウェーバーはマックスウェーバーの妻として知られているが、自身も哲学的な著作を残している。彼女の思想の背景には夫マックス・ウェーバーの存在はもちろんあるのだが、女性論という点では、同時代の哲学者であり社会学者でもあったゲオルク・ジンメルの影響を無視するわけにはいかない。ジンメルはウェーバー夫妻の友人であり、「女性の心理学について」(1890) 以来、様々に女性の問題を取り扱ってきた。マリアンネ・ウェーバーの著作に使われている語の含意もジンメルと共有されている部分が多い。そこで、本論ではまずジンメルの女性論にふれておきたい[1]。

ジンメルは女性の社会参加に対して肯定的である。まだ女性に大学での学問が公的には認められていなかった当時にあって、女性が大学で研究することを擁護する立場をとり[2]、ベルリンで催された女性会議にも出席し、その時の体

験を元に小論を書いてもいる[3]。それでは、ジンメルは当時の女性運動にどのように関わったのだろうか。結論から言えば、ジンメルは女性運動に具体的に深く関わるというよりは、男女の本質的な相違と文化との関係を「生の哲学」という形而上学的なレベルで論じたというべきである。ジンメルは「女性文化」(1911) の中で、当時の女性運動の問題点を指摘している。

ジンメルは文化を「客観的文化」と「主観的文化」に分け、前者を物的な文化財はもとより、法や道徳、政治システムなど現実的であれ観念においてであれ、存在するすべてのものであるとし、後者を客観的文化に関与して成り立つ個人の文化的成長であるとする。両者はそれぞれ自立的に存在している。したがって、社会における客観的文化の発展の程度と個人の文化的発達の程度は必ずしも一致しない。

こうした文化の概念を前提にしながら、ジンメルは、女性運動と文化の問題を関連させて、当時の女性運動は主観的文化の側のみを問題にしているという。「女性たちは、男性たちの生の形式や業績の形式へと移行しようとしている。ここで女性たちにとって問題になるのは、既存の、女性たちにはこれまで拒まれていた文化財への個人的な関与である。」(Simmel：[1911]＝1996, 418/1976, 289) 当時の女性運動は参政権をはじめとする女性の社会参加を推進することであった。このことは女性が既存の文化を受容するということを意味する。そうすることによって成長するのは個々人の主観的文化である。したがって、こうした女性運動は個々の女性の文化的完成にとって有意なものであると言うことになる。しかし、個々の女性の主観的文化の成長への道が開かれたとしても、そこでは個人的なものをこえるような「客観的に新しいものの創造」が達成されるわけではないとジンメルは考える。ジンメルは「おそらく、女性運動のあらゆる幸福主義的、倫理的、社会的アクセントはこの方向に留まっているだろう」と女性運動を位置づけ、さらにこのままでは「こうした運動から質的に新しい形成物が、事実的な文化内容の増大が生じるかどうかという問題は消滅してしまうのではないだろうか。」(Simmel：[1911]＝1996, 418/

1976，289-290）と考えるのである。

ここからジンメルは、女性が既存の客観的文化にいかにして関わるかということを問題にするのではなく、女性の本質に根ざす新しい客観的文化の創造は可能なのかという問題、すなわち「女性の本質と客観的文化との原理的な関係」（Simmel：[1911]＝1996，418/1976，290）を問うべきであるという。

2.2　両性の本質と客観的文化

それでは、「女性の本質と客観的文化との原理的な関係」とはどういうものなのか。ジンメルは男女に本質的な違いがあることを前提にし、そもそも近代の客観的文化は男性的であるという。文化が両性的な、いわば純粋に人間的な文化に見えるとすれば、それは、ただ男性と人間を同一視したためにおこるあやまりであるというのである。

近代の客観的文化が男性的であるというのは、これまでの文化の創造も受容もともに男性によって担われてきたからというだけでなく、男性の本質が近代の客観的文化の本質に親和的であるということによる。ジンメルは、近代の客観的文化を、人格的（persönlich）なものに対して、即物的（sachlich）な性質をもつもの、分化と分業によって発展してきたもの、専門性によって支えられるものであると見ている。そして、「分業は労働の歴史全体が示しているように、あきらかに、女性的な本質よりもはるかに、男性的な本質に適している」（Simme：[1911]＝1996，422/1976，293）と言う。これに対して、「女性の精神的な特性一般を象徴的に表現するならば、その周縁部分が中心に緊密に結びついており、男性的な本質以上に部分は全体に連帯している。」（Simme：[1911]＝1996，422/1976，294）

ここでいう男女の本質とはそれぞれの生（Leben）の本質を指している。ジンメルは男性の生を、自己を超えていこうとする超越的な契機をもつものであり、女性の生を求心的で未分化、自己充足的に自身の中に安らっているものであるとする。また、即物的な男性の生に対して、女性の生をより人格的である

とする。こういう性質をもつ女性は、分化と分業を基礎とした即物的な客観的文化の創造には適さない。ここから、ジンメルは客観的女性文化というのは「形容矛盾である」と言うのである。(Simmel：[1911]＝1996, 457/1976, 331) だとすれば、女性は客観的文化の創造には適しておらず、はじめに問題にしていた女性の本質に根ざした客観的に新しいものの創造は女性には不可能であるという結論が出てしまう。

しかし、もし、ジンメルが女性の客観的文化への創造的関与を不可能であると見ているのならば、なぜ彼は女性文化の問題に関わり、これを論じたのだろうか。そして、女性運動が、男性のつくり出した客観的文化の、女性による受容を促進するだけでは足りないと考えるのはなぜなのだろうか。

2.3　女性の本質の意味と価値

このようなジンメルの考え方の背景には近代文化に対する危機感が潜んでいる。近代の客観的文化は、それを生みだした主観から離れ、過剰に即物的になる。あるいは、客観的文化が主観（人間）にとっての枷になることもありうる。また、客観的文化は急速に増大するが、それを受容して成り立つ個々人の主観的文化がそれに見合った発達を遂げているとは言いがたい。つまり、主観的文化と客観的文化の質的、量的な不均衡が見られる。こうしたことが生じるのは、客観的文化が、一度生みだされると、主観を離れて独自の意味と価値を持つようになり、これを生みだした主観の制御を受けない存在となるためである。ジンメルはこの点に文化価値の独立を認めるのではあるが、同時に主観と客観の二元的分裂という解きがたい問題があると考える。そしてこれを「文化の悲劇」と呼ぶ。

近代文化が男性文化であるという以上、同様な問題を男性的な生のあり方も持っていると考えられる。そこで、こうした近代文化のあり方を根底から変えていくものとして、男性的な特質とは異なる女性的な特質に期待を寄せるのである。ただ、ジンメルが言う男女の生のあり方の違いは、男女それぞれに直接

体現されているわけではない。だから、ジンメルはこれを単に女性による文化創造であると考えているのではないのである。したがって、女性が既存の文化形式のうちで何か創造的な活動を行ったとしても、それはあくまで男性文化としての近代文化を担ったというにすぎないということになる。だから、ジンメルは「個々の女性が客観的な文化創造に成功すること、あるいは成功しうることは、だれしも否定しないであろう」(Simmel：[1911]＝1996, 457/1976, 331)と言う。実際の女性が、男性的な特質をもつ客観的文化の創造を担うことはありうるのである。「しかしこのことによって、この創造のなかに女性的なものがいかなる男性にもなしえないようなものとして客観化されるか否かは、いまだ未決定である。」(Simmel：[1911]＝1996, 457/1976, 331)

男性的な生のあり方とは異なった女性的な生のあり方から生みだされた特殊女性的な創造によって、文化の悲劇を乗り越えることをジンメルは考えている。だが、それがどういうものであるのか、そのために女性は具体的に何をすべきか、女性の当為とはなんなのかという問題については触れられていない。

3．マリアンネ・ウェーバーの女性論

3.1　女性運動と伝統的な女性像への批判

自ら女性運動に関わって、近代文化における女性の当為とはなんなのかという問いに答えようとしているのが、マリアンネ・ウェーバーである。彼女はこの問題を「新しい女性」(1914) において論じている。ウェーバーは、1919年から1924年までドイツ女性団体連合の代表を務め、ブルジョワ女性運動の論客の一人であった。彼女は「新しい女性」において、女性が家庭から外に出て、互いに連帯して組織的に女性の問題に取り組むべきであると述べている。そして、こうした女性の精神的社会的自立をめざす運動に関わる女性を「新しい女性」と呼ぶ。(Weber：[1914]＝1919, 134)

ウェーバーもまた、既存の文化が男性によって創造され、担われてきたことを認める。そして、女性も文化創造に関わるべきであるということを主張する。

また、ウェーバーにとって重要なのは、女性がこうした創造に関わることを「非女性的」「女性自身の理念からの離反」(Weber：[1914]＝1919, 135) だとみなしてきた従来の考え方に対抗することであり、文化創造という女性にとっての新しい課題を「多くの同様に規定された同性仲間との組織化された共同性の中 (in organisierter Gemeinschaft) で追求する」(Weber：[1914]＝1919, 135) ことである。

女性の共同性、連帯をウェーバーは重んじるのだが、そこにはこれまでの女性が家の中で、女性としての類を失った (Gattungslos) 閉塞的な生を営むことを余儀なくされてきたことへの批判がある。単なる性的存在としての女性は、男性の性的対象として存在する。結婚し家庭にあることが女性にとって唯一の居場所であるかぎり、女性同士は自分に家庭を提供する男性をめぐる争いのライバルとして存在するしかない。そこには女性同士の類的な連帯は生まれてこない。そこで、ウェーバーは「性的に規定された領域の彼岸ではじめて、女性が自らを同じ努力をするものとして、共同の力へとまとめる土台が発生する」という。(Weber：[1914]＝1919, 135) つまり、特殊性的な存在ではないあり方が求められるのである。ウェーバーはこうした性的な規定の彼岸にあるものとして「人間的なもの (das Menschliche)」(Weber：[1914]＝1919, 135) を掲げる。この中性名詞で言い表される共通のあり方が女性を連帯させるのである。そして、「女性たちが今日、あらゆる伝統のあらゆる反発、男性の性的関心、伝統的な女性性という理想像に抗して、共同で形成する力を発展させることはまったく新しいことである。」(Weber：[1914]＝1919, 135) とウェーバーは言う。ウェーバーにとって、女性が組織的に共同する女性運動の意義はこのような意味において大きなものであったということができるだろう。また、伝統的な意味での女性性が、たとえ女性の本質を肯定的に捉えるものであったとしても、やはりその理想像を崩していかなければ、女性の社会的解放はあり得ないという思いがあったと見ることができる。

3.2　女性の固有性と性を超えた文化的あり方

「人間的なもの」を軸に女性が組織的に連帯することを説き、「伝統的な女性性」という理想像を打ち砕こうとするマリアンネ・ウェーバーだが、彼女も女性に固有の本質があると考えている。それをウェーバーは「母性（Mutterschaft）」「母性性（Mütterlichkeit）」（Weber：[1914]＝1919，138）であるといい、これを「自然な本質」であるとしている[4]。

女性の本質を「母性」に求めるという考え方は、フェミニズムに与するものも、反するものもともに、自身の論を展開するために用いてきた。ウェーバーの関わるブルジョワ女性運動も、女性解放の立場に立ちつつ女性の本質を「母性」に見いだすことには肯定的である。だが、ウェーバーはここではこれ以上この問題に踏み込んではいない。ここではむしろ、女性をその「本質」に縛り付け、女性解放に肯定的であるにせよ、否定的であるにせよ、女性をその「本質」から「自然」に近い存在であると捉える考え方を批判する。ウェーバーは「我々は今日、女性の発達をその特殊な規定の中へと囲い込もうとする、女性を自然性へと呼び戻そうとする多くの声を聞く」と言い、（Weber：[1914]＝1919，139）「こうした女性特有のあり方や課題以外に、女性は男性と同じ本質の傾向や能力の豊かさを持っている」（Weber：[1914]＝1919，138）ことを指摘するのである。女性も男性と同様、近代文化の中に生きている以上、文化発展の過程のうちのある。女性だけが自然な本質に留まっていることなどありえない。ウェーバーは女性もまた「精神的に形成された本質（*geistig geformte* Natur）、すなわち、性を超えた状態や能力を伴った文化的存在（Kulturwesen）」（Weber：[1914]＝1919，138強調 Weber）であるとするのである。

それでは、女性に固有の本質と男性と同じ文化的なあり方とを二重に背負った女性にとって重要なことは何なのだろうか。ジンメルは女性の固有性から出てくる新たな文化に近代文化の問題を乗りこえる可能性を見い出しているのだが、ここでのマリアンネ・ウェーバーは、個々の女性の生の完成こそが重要であると言う。それは「自分自身の生の意味や価値を何らかの仕方で自立的

(*selbständig*) に形成すること、生を自身の力で生みだすこと」(Weber：[1914]＝1919, 139強調 Weber) であり、これは実は女性にだけあてはまるものではなく「完成へ向けて努力する存在が自分自身に立てる、普遍的で人間的な、最高の要求である」(Weber：[1914]＝1919, 139) と言う。こうした個人の生の完成は、いわば主観的文化の完成である。主観的文化の完成は男女いずれにとっても文化の究極的な課題である。そのうちでも、女性にとって重要なのは自立と自律である。というのは、自立し自律的に自らの生を完成させていくことは従来の女性のあり方とは対極を成すことだからである。

ウェーバーは従来の女性の自立と自律が妨げられているのは、女性が専ら人格的な関係の中で存在してきたことによると考える。「人のために生きることは、専ら女性的な存在の内容である。すなわち、それは性愛的感情 (erotisches Gefühl)、血縁 (Blutsbande)、人格的共感 (persönliche Sympathie) によって結びついた人間のために生きることである。」(Weber：1914, 139) そしてこうした特定の人のために生きる生き方は「その人から自分の存在の内容を満たしてもらうことを意味する」(Weber：[1914]＝1919, 139) と言う。すなわち、これは他人への従属である。

ジンメルは、人格的なものを豊かにもっている女性の生を、男性の生とは異なる別な価値を有すると考えている。しかし、ウェーバーはそれが同時に女性の自立と自律にとってはマイナスに働くことを指摘している。このように見れば、ウェーバーは女性に男性文化への同化を促しているだけにように見える。だが、ウェーバーの主眼は、女性を伝統的なあり方という鋳型にはめ込むことに対抗することにある。そして、「『新しい』女性は、自身が自己完成への道を自分の足で歩いていくことが人間の宿命であり義務であると認識している」(Weber：[1914]＝1919, 140) と言い、旧来の女性のあり方を乗りこえようとするのである。

人格的な関係への没入を伝統的、典型的に女性的なことであり、それが他人への依存を生むとウェーバーは見ている。女性が自立と自律を確立するには他

人への依存を解消しなければならない。そもそも「ただ何らかの方法で秩序、即物性、理念、客観的価値という人格を超えた世界に根を張るもののみが、自分自身に基づく存在になる可能性をもつ」(Weber：[1914]＝1919, 140) とウェーバーは考える。このことは、ジンメルが客観的文化という迂路を経て主観的文化の完成へいたると考えることと一致している。しかし、人格的なあり方と即物的なあり方を対比し、近代文化の過剰な即物性と人格的なあり方からの乖離に危機を見いだすジンメルに対して、ウェーバーは、主観的文化の完成のために、女性はまず客観的文化に関わるべきだと考えている。それは、客観的文化の創造にも受容にも与ることの少なかった女性が今取り組むべき課題だというのである。

3.3 性別分業から両性的完成へ

これまで見てきたように、伝統的で特殊女性的なあり方を離れて、中性名詞で言い表される「人間的なもの」に立脚することが女性にとって重要であるとウェーバーは考えている。それでは、男性はどうなのだろうか。

ウェーバーは、男性は人間と同義であるとみなされてきたという。したがって、有用な力や能力を発揮し展開させていくことという人間にとって普遍的当為だとされることは、男性にとって当然あてはまっている。しかし、やはり男性にも特殊男性的な部分があるとウェーバーは考える。「新しい女性」の中ではウェーバーはそれを明確には述べていない。しかし「女性の特殊な文化的課題」(1918)[5]において、それを専門人としての一面性であると指摘している。これは、ジンメルが分業を男性の本質に親和的であると考えたことと一致している。

男性は若い頃から職業のための専門教育をうけ、長じてのちには専門性のある職業につく。「その際、彼らは職業上の要求によって、専ら専門人やスペシャリスト (Fachmenschen und Spezialisten) へと狭められ (verarmen)、一面化させられるという危険がある。」(Weber：[1918]＝1919, 254) このように一

面的、知的に発達したタイプの男性は特殊な知識や能力をもたずに発達した女性の調和のとれた統一的な生を自身の生と対置し、女性の生を自身を補うものであると考えるようになったり、逆に無価値なものであるとみなしたりするようになる。(Weber：[1918]＝1919, 254) ウェーバーはこのような男性の専門人としてのあり方を批判的に捉えながらも、それが文化に関わる際の大きな財産になることを認める。職業上の教養を身につけることによって、男性は客観的文化に深く関わることができるからであり、ひいてはそれが主観的文化の発展に寄与するからである。これに対して、専門的な職業上の教養を身につけることのなかった女性は「事柄 (Sache) それ自体のための真剣な努力、事柄への献身が必要である」(Weber：[1918]＝1919, 254) とウェーバーは言う。女性が真に文化的発展を遂げるためには、まず客観的文化すなわち人格を超えた事柄への沈潜と献身が必要だと考えるのである。

ウェーバーは特殊男性的な性質のもつ問題について、「新しい女性」においても触れている。男性は特殊男性的なあり方に欠陥を感じると、それを女性によって補完されることを望む。「男性の休むことのない生成には自らの中に安らっている存在を、男性の特殊性には存在の全体を、男性の客観的なものへの献身には人格的なものへの献身を男性の仕事の完成 (Werkvollendung) には存在の完成 (Seinsvollendung) を対置すべきである。こうした分業によって人間存在の理念は満たされる」(Weber：[1914]＝1919, 141) というのが、男性の望んでいることである。

ウェーバーは、こうした考え方に異を唱える。そもそも人間として完成することを目指す男性は、仕事の完成以外に存在の完成へ向けて努力をすることも必要である。男性が、即物的な面で能力を発揮しているからといって、人格的な生活や愛や日常の美などを免除されたままになっているとしたら、それは間違いである。(Weber：[1914]＝1919, 141)「主観的文化にとって、人間の本質的発展にとって、性別による分業は常に一面性と不完全性を意味している。それは、決して、それぞれの性が他方の性で自身の欠陥を補うことによって満

たされるものではない」(Weber：[1914]＝1919, 141-142) とウェーバーは言う。客観的なものにより多く関わってきた男性には人格的なものへの関与を、人格的なものに主に関わってきた女性には客観的なものへの関与をそれぞれ求めることが人間の本質的発展にとっては重要だというのである。

性別による特殊性を認めるウェーバーであるが、文化の本質的な発展、人間の本質的発達にとって重要なのは、それぞれの性がともに両性のもつ性質を備えていることだということになる。ウェーバーはこれを踏まえて女性の当為を次のようにまとめている。「汝の女性としての特殊な規定を普遍的人間的規定と一致させるようにせよ。」(Weber：[1914]＝1919, 142) そして、社会は、女性が客観的なものに関わることを妨げてはならないとし、女性をその特殊性にとどめようとする考え方と対峙するのである。

4．キャロル・ギリガンの心理学的両性的成熟論

4.1　ギリガンへの評価

キャロル・ギリガンは『もうひとつの声』(1982) で、発達心理学の観点から男性と女性の道徳的な発達の違いに着目し、男性のモデルでは説明できない女性の発達過程に独自の意味を見いだそうとする。心理学者であるギリガンは、男女の違いを心理学的観察によって経験的に探っている。

男女の性差を扱うギリガンの研究には、たとえこれが女性に固有の価値を見いだすものであったとしても、男女の性差を固定化し、ただその優劣を従来のものとは逆転させただけの思想であって、結局は既存の性別役割分業を根拠づけることになる保守的な思想ではないかという批判がある。(上野：2002) 一方、この著作は、平等、公正に基づく倫理に、他者を配慮することを重視する「配慮（ケア）の倫理」を対置するものとしても読まれるが、こうした観点からギリガンの思想を「ジェンダー本質主義」「性差本質主義」とは異なるものであると考える立場もある。(大越：1996・川本：2005・山本：2008) ギリガン自身「私が書いている『異なった声』というのは、ジェンダーによって特徴

づけられているのではなく、テーマによって特徴づけられている」と言い、「こうした関係は絶対的なものではない。そして、男性の声と女性の声の対比が示されるのは、ここでは、二つの思考様式の違いに光を当てるためであり、両性についての一般化を描くというよりも、むしろ解釈の問題に焦点をあわせるためである」と述べている。(Gilligan：[1982]＝1993, 2/1986, xii)

本論では、後者の立場に立ちつつ、性の問題から出発して、既存の倫理が取りこぼしてきた領域を拾い上げ、それに光を当て、さらに従来の倫理と統合することを試みるギリガンの思想にジンメルやウェーバーとの共通点を見いだし、ジンメルやウェーバーが論じた問題を、ギリガンの問題意識を通して、現代的な観点から見てみたい。

4.2　規則への順応と他者への配慮

ギリガンは従来の心理学的研究への批判と自身で行った面接調査を元にして、これまで十分に考察されてこなかった女性の発達過程を再検討する。その際、他者への愛着や依存とそこからの分離と独立、他者への親しみの感情と個としてのアイデンティティの確立というキーワードを元にして、男女の発達過程の違いを探っていく。これは、人間の発達を自己の確立と他の人間との関係という二つを軸にして捉えたものであり、この点に男女の違いがあると考えるからである。ここでは、まず、ギリガンによって述べられているいくつかの具体的な例を取り上げて、男女の違いがどのように捉えられているのかを明らかにしておきたい。

ギリガンは『もうひとつの声』第一章「男性のライフサイクルのなかでの女性の位置」において、子供が遊びを通して社会的に発達すると考えるピアジェと、そこに男女の性差を見いだそうとしたレバーの研究をもとに、男女それぞれの発達過程の違いについて述べている。

ピアジェやレバーの研究によれば、子供は遊びを通して繰り返し喧嘩をし、それを解決する手段として規則を作り出し、これを遵守することを覚えてい

き、これが子供の道徳性を発達させると説明している。しかし、ここで言われる子供というのは少年たちであり、少女たちはこれとは異なっている。少女たちは、遊びの中で揉め事が発生するとすぐに遊びをやめてしまうことが観察されている。

少年たちは一定の規則を持った比較的大きな集団の中で競争すること、それを公正に行うべく規則をつくることを覚えていく。ここで身につけたことは現代社会に適合的なあり方であると言える。これに対して少女たちの遊びはより小さな、より親密なグループ内で行われる。これは組織内での人間関係が互いに協力的な原始的社会での状態に近いと言えるだろう。

このような観察結果から、ピアジェが人間の発達と少年の発達が等しいものだと見て、少女たちは少年たちに比べて道徳的発達に必要な規則感覚についての発達が遅れていると考えることに対して異を唱える。「少女たちの遊びは、『一般化された他者』の役割を演ずることを学ぶという指向性は少なく、また人間関係の抽象化を指向することも少ない。しかしそれは、『特定の他者』の役割を演じるために、感情移入や思いやりの発達を促し、自分とは違ったものとして他者を知ることをより指向しているのである。」(Gilligan：[1982]＝1993，11/1986，11-12）少年たちは遊びを通して規則に関心をよせるようになり、その社会的方向付けは「地位的」(positional）である。これに対して少女たちは人間関係に関心をよせ、その社会的方向付けは「個人的」(personal）であると言える。(Gilligan：[1982]＝1993，16/1986，20）さらにギリガンは、「レバーの議論の結果を形成している前提は、男性のモデルは、現代社会における成功という要素に合うという理由でよりよいものであるというものである。これと対照的に、少女達が遊びを通して発達させる、思いやりや他人の感情への配慮（care for the feelings of others）はあまり市場価値がなく、かえって職業的成功の妨げになる」(Gilligan：[1982]＝1993，10/1986，10）と言う。ギリガンは、揉め事があると遊びを中断する少女達が劣っているわけではなく、彼女たちは人間関係の継続を遊びの継続よりも重要であると考えているの

だとする。そして、現代社会における成功とは直接結びつかない少女達のこうした特徴を低く評価する社会のあり方に問題を見いだしているのである。

4.3 愛着と分離

もう一点、『もうひとつの声』第六章「成熟の姿」における、男女の道徳的発達過程についてのギリガンの考察を見てみたい。

人間の心理的発達過程は「愛着」(attachment) と「分離」(separation) によって説明されている。初めは母子間の愛着があり、しだいにそこから分離して個別性や自立性を身につけることによって人間は成長していく。だが、愛着と分離は、幼児期にのみ見られるものではない。思春期には他人への親しみと自己のアイデンティティの確立として、成熟期には養育者としての愛と仕事の達成という形で現れる。その際、幼児や思春期の人間の発達過程をモデルに、人間は分離によって個別化を達成し、個別化の後に再び愛着を発達させると考えるのは、男性の発達モデルであるとギリガンは言う。しかも、男性については、成人後分離の成功体験は多く語られるが、その後に現れる愛着への進展が明確でない場合が多い。ここでは、発達の要は分離であると捉えられているのである。

発達を分離を軸に描き、愛着や結びつきを重視しないものの見方は「再び、女性たちを関係性の中にはまり込んでいるものとして描くことによって、彼女たちの分離が不完全であることを示す」(Gilligan：[1982]＝1993, 155-156/1986, 275) ことになるという。というのは「思春期、成人期を通じてあらわれる分離と愛着という発達の印は、女性にとっては融合しているように思われる」からである。そして、「分離に対して報いるような社会では、こうした融合は女性たちにとってリスクとなる」ことが指摘される。(Gilligan：[1982]＝1993, 156/1986, 275) このように見れば、他人との関係から分離することは、現代社会にとってプラスに働き、いわば社会的な有用性をもっているために、愛着よりも高く評価されるが、この点の曖昧な女性は分離の失敗として低く評

価されることになると言えるだろう。これに対して、男性については分離は十分に説明できるのだが、愛着については不明確である。分離が客観的な世界（近代産業社会）にとって評価され、客観的な世界を構成する男性の発達過程の中に愛着の成長があまり見られないということは、その世界そのものが愛着の意味するところ、豊かな人間関係や他人への配慮を欠いた、あるいはこれをあまり重視しない未成熟な状態にあることを表していると言えるだろう。

4.4 成熟と相補性

以上みてきたように、男性の発達は主に分離によって説明され、愛着については不明確なままであることが多く、女性の場合は分離と愛着が融合している。「女性たちは、彼女たちのアイデンティティを親しみと配慮（care）という関係を通して定義する」（Gilligan：[1982]＝1993，164/1986，289）のである。

ギリガンは分離による自己の人格の統合と他者への配慮とを二つの道徳的な思考様式と結びつけて説明している。それは「権利の倫理」（an ethic of rights）と「配慮（ケア）の倫理」（an ethic of care）である。前者は「他者と自己の主張を均衡させて、どちらも等しく尊重することを明らかにするものであり」、後者は「責任の倫理」（the ethic of responsibility）とも呼ばれ、「共感と配慮を生む理解に基礎を置いている」とされる。（Gilligan：[1982]＝1993，164-165/1986，290）もちろん、分離に依拠する男性のあり方が「権利の倫理」と関連し、他人を配慮することを重視する女性のあり方が「配慮（ケア）の倫理」と関連している。前者は規則による公正さを重んじ、後者は他人に配慮するために他者の要求に耳を傾けようとする態度だと言っていいだろう。そしてギリガンは「両者の相補性（complementarity）が成熟のあらわれである」と言う。（Gilligan：[1982]＝1993，165/1986，290）

ここでいう相補性とは、互いに異なった性質をもって、分業によって補い合うということではない。男女両性がそれぞれに、双方のあり方を身につけると

いうことを意味している。男性も女性も成人になると「寛容」(tolerance) へと向かっていく。寛容は、絶対的なものを放棄することによって成り立つ。絶対的なものは男性と女性では異なっている。女性にとっては「配慮という絶対的なもの」が「個人としての統合の必要性を認識することによって」相対化される。「こうした認識は、権利の概念の中にあらわれている平等に対する要求を生じさせ、それが関係についての理解を変更し、配慮の定義を変質させる。」(Gilligan：[1982]＝1993, 166/1986, 292) これに対して男性は「真実や公正さというという絶対的なもの」が「自己と他者との違いを示すような体験をすることによって」疑問視されるようになる。(Gilligan：[1982]＝1993, 166/1986, 292) そしてここに「寛大さと配慮の倫理が生じるのである」(Gilligan：[1982]＝1993, 166/1986, 293) このように男女ともに、それぞれ自身のものとは違った倫理の存在に気づき、それを採り入れることによって、過去には絶対に正しいと感じていた考え方に修正を加えるようになる。ここに両性のもつ性質を併せ持った成熟の姿が見られるのである。

ギリガンの考えには、一つは個人の心理的な成熟には、権利の倫理と配慮の倫理の両方が必要であるという個人の両性的な完成を求めるという側面がある。もう一つは、分離が現代社会にとって好都合であるために、男性の側に配慮の倫理の基礎となる愛着を成長させていく契機が少ないということを問題視するという側面がある。個人の両性的な完成を促すには、それを評価する社会の両性的な成熟が必要なのである。

5．おわりに

ジンメルは男女の質的な違いに立脚し、男性文化である近代文化の「悲劇」を女性的な生のあり方によって乗りこえようとしている。それは、フェミニズムに関わるものが、単に女性を近代社会の権利主体とすることによって問題を解決することはできないと気づいている現代の状況を先取りしているといえるだろう。

マリアンネ・ウェーバーもギリガンもともに、ジンメルと同様、男女の質的な違いを前提にしている。しかし、両者ともに、性別による役割分業を肯定するのではなく、個人的なレベルでも、社会的なレベルでも、両性の性質を併せ持つことによってはじめて成熟を迎えるという観点をもっているということができるだろう。

ここで論じられているのは、もはや男女の本質の違いではない。ジンメルやウエーバーの場合、それは二つの生（Leben）のあり方であると言うことができるし、ギリガンの場合は二つの倫理的思考様式であると言うことができる。三者の言う二つのあり方や様式のうち、一方はこれまでの社会や文化をつくってきたあり方であり、もう一方は、忘れられたり、低く評価されたりしてきたものである。このもう一方に光を当て、その価値を見いだすことが、社会にとっても個人にとっても成熟と完成に至るために重要であると考えられている。したがって、ここで言われていることは、男性に欠けている部分を女性によって補うということや、男性性に対して、女性性を称揚したり神秘化したりすることとは違っている。二つのあり方や様式のうち、どちらか一方に与するのではなく、また、一方の足りない部分を他方で補うのでもなく、両者の性質を併せ持った点に現在の文化や社会の問題を乗りこえる方途があると考えているのである。

ウェーバーは、女性運動の黎明の時代にあって、女性の社会参加の必要性を説いたが、一方で、男性の「人格的なもの」への関与の必要性にも言及している。即物的なあり方と人格的なあり方とを併せ持った点に文化的成熟があると考えているのである。ギリガンもまた、「分離」による自己の統合と独立にこだわるものに「愛着」と「配慮」による他者との関係の世界へ入っていくことを促し、権利の倫理と配慮の倫理の結節点に成熟の姿を見るのである。

もちろん、ここで「二つの」様式、「二つの」あり方というが、それが実際に「二つ」に留まるものであるかどうかはわからない。しかし、ギリガンが、これまでの発達理論研究が、女性の発達を説明できなかったことに言及して

「女性たちの生（women's lives）の異なった現実を見ること、女性たちの声の中に異なったものを聴くことに失敗する一つの理由は、社会的体験や解釈は一つの様式しかないという想定に起因している」（Gilligan：[1982]＝1993，173/1986，304-305）と言うのを聴くとき、複数の様式やあり方、複数の声が存在することに気づき、それに耳を傾けることが、われわれれの社会的、文化的、また個人的な課題であると知ることができるのではないだろうか。

註

1　ジンメルの女性論の詳細は拙論「ジンメルにおける文化と生ならびに性の問題」（川本：2008）参照。ジンメルには、女性固有の活動の場として「家庭」や「男性への影響」をあげているという側面もある。拙論では、こうした点に対するマリアンネ・ウェーバーの批判を論じている。

2　ジンメルには匿名で新聞に投書した小論“Frauenstudium an der Berliner Universität”（1899）がある。（Dahme/Köhnke：1985）

3　ベルリン女性会議では、社会民主党とブルジョワ女性運動の対立が激しく、ジンメルはブルジョワ女性運動の立場に近い。（Köhnke：1996）また、自身の立場を“Der Frauenkongreß und die Sozialdemokratie”（1896）で表明している。（Dahme/Köhnke：1985）

4　ウェーバーの立場はこうした点では保守的であり、いわば「穏健派」である。母性主義をとったドイツの女性運動穏健派は、祖国への奉仕を重視し、それがナチスへの肯定的な見方につながった。彼女たちの運動は、個々の女性の性の解放よりも広く社会、文化に貢献する女性のあり方を問おうとするものであったためである。これについては姫岡とし子が詳細に論じている。（姫岡：1993，188-189）

5　ウェーバーのこの論文は第一次世界大戦終結の頃に書かれたものであり、銃後にあった女性の、戦争によって破壊された社会秩序や文化の回復に対する貢献、役割を主に論じている。ここでは、女性に固有の、母性、母性性が社会的な救済活動に適しているという考えが展開されている。これについても姫岡とし子が当時の穏健派女性運動の特徴であることを指摘している。（姫岡：1993，24-25）

文献

Butler, Judith, 1990, *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity,* New York and London: Routledge.=in Routlage Classics 2006（竹村和子訳　1999『ジェンダー・トラブル　フェミニズムとアイデンティティの攪乱』青土社）

Dahme, Heinz-Jürgen, Köhnke, Klaus Christian, hersg., 1985, *Georg Simmel Schriften zur Philosophie und Soziologie der Geschlechter,* Frankfurt am Mein: Suhrkamp

Gilligan, Carol, 1982, *In a Different Voice—Psychological Theory and Women's Development—*, Cambrig, Massachusetts, and London, England: Harvard University Press.（岩男寿美子監訳　生田久美子　並木美智子訳1986『もうひとつの声—男女の道徳観のちがいと女性のアイデンティティ—』　川島書店）

姫岡とし子，1993『近代ドイツの母性主義フェミニズム』勁草書房

川本格子，2008「ジンメルにおける文化と生ならびに性の問題」『社会学評論』日本社会学会，Vol. 58，No. 4，540–556

川本隆史編，2005『ケアの社会倫理学—医療・看護・介護・教育をつなぐ—』有斐閣選書

Köhnke, Klaus Christian, 1996, *Der junge Simmel—in Theoriebeziehungen und sozialen Bewegungen,* Frankfurt am Mein:Suhrkamp.

Simmel, Georg, [1911] 1996, „Weibliche Kultur", Otthein Rammstedt hersg., *Georg Simmel Gesamtausgabe* Bd. 14, Frankfurt am Mein: Suhrkamp（円子修平　大久保健治訳　1976「女性文化」『ジンメル著作集 7 文化の哲学』白水社，288–333）

大越愛子，1996『フェミニズム入門』ちくま新書

上野千鶴子，2002『差異の政治学』岩波書店

Weber, Marianne, [1914] 1919, „Die neue Frau", *Frauenfragen und Frauengedanken: Gesammelte Aufsätze,* Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), 134–142.

————————, [1918] 1919, „Die besonderen Kulturaufgaben der Frau", *Frauenfragen und Frauengedanken Gesammelte Aufsätze,* Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), 238–261.

山本真理子，2008「平等性と個人的差異性——ギリガンのフェミニズム理論への新視角——」『ソシオロジ』社会学研究会，第53巻 2 号3–19.

（本文中には翻訳書のページもあげているが、必ずしも翻訳書どおりの訳ではない。）

Summary

Vom Essentialismus des Geschlechtsunterschiedes zur Vollendungdes Menschlichen:

Georg Simmel, Marianne Weber, Carol Gilligan

KAWAMOTO Kakuko

Simmel, Weber und Gilligan beschäftgen sich mit dem Geschlechterproblem.

Simmel erörtert das Verhältnis zwischen der modernen Kultur und den Geschlechtern. Simmel behaupted, dass das Wesen der Männer die sachliche und sich differenzierte Eigenschaft zeigt. Dagegen ist das weibliche Wesen einheitlich in sich ruhend. Im Aufsatz „Weibliche Kultur" erklärt Simmel, dass unsere moderne Kultur männlich ist, weil sie mit dem männlichen Wesen verwandt ist. Nach Simmel gerät die moderne Kultur in den Zwiespalt zwischen Subjekt und Objekt. Die dualistische Eigenschaft stimmt mit dem männlichen Wesen überein. Simmel erblickt daher im einheitlichen Wesen des Weibes die Möglichkeit, das Problem der modenen Kultur zu überwinden.

Im Aufsatz „Die neue Frau" fordert Marianne Weber, dass auch die Frauen sich mit dem Schaffen der modernen objektiven Kultur beschäftigen. Obwohl Weber den Geschlechtsunterschied anerkennt, glaubt sie, dass die Frauen sich auf die alte traditionelle Rolle der Frauen nicht beschränken sollen. Weber kritisiert außerdem, dass die Männer als Fachmenschen einseitig verarmt sind, dann sie behauptet, dass auch die Männer am menschenwürdigen Leben teilnehmen sollen, wie Frauen. Weber denkt daran, dass die Vollendung der Menschlichkeit in *dem Menschlichen,* d.h. jenseits von weiblich und männlich liegt.

In der Schrift „In a Different Voice" findet Gilligan druch die

psychologische Beobachtung im Benehmen von Frauen die andere Moral als die Gerechtigkeit. Die Moral befindet die Sorge und Verantwortung für andere Leute als wichtig. Nach Gilligan entwickeln sich Männer und Frauen moralisch durch jeden unterschiedenen Weg. Frauen halten die Sorge und Verantwortung für wichtig, Männer die Gerechtigkeit. Bisher sind jene in unserer Gesellschaft nicht so wertvoll gefunden worden. Aber wenn man zur Reife erreichen will, muss man die beiden Arten nehmen.

Die drei Gedanken beruhen auf dem Geschlechtsunterschied, aber sie wollen die traditionelle Genderrolle nicht akzeptieren. Sie berühren zwei Lebensarten und zwei etische Gedanken. Sie finden es wichtig, dass man für die Vollendung der Kultur wie der Gesellschaft und für die Reife der Menschlichkeit der beiden unterschiedenen Arten und Weisen bedürft.